



漁船で説明を受ける部員たち



底引き網で引きあげられた海底ごみ



引きあげられたごみを分別する

海底ごみをなくしたい！中高生たちの取り組み

岡山県 山陽女子中学・高等学校 地歴部顧問 井上貴司

地歴部の活動

岡山県山陽女子中学・高等学校の地歴部（現在中学生5人、高校生15人）では、漁船に乗り沖合に出て、海底に沈んだごみ（海底ごみ）を回収・分別する活動を年に3～5回行っている。活動の拠点となっているのは、岡山県浅口市寄島港である。瀬戸内海は表面的にはとてもきれいに見える。ところが、実際に網を引きあげてみると、たくさんのごみが網にかかってくる。これほど多くのごみが海底に沈んでいるとは、実際に体験しないとわからないことであった。活動を通して、生徒の意識も大きく変わっていった。

海底ごみとの出会い

4年前、私が地歴部の顧問になった際、何か生徒と一緒に活動できることはないかと考えた。昨今、地球環境問題が深刻化していることから、授業以外でも環境問題について勉強させたいという思いがあった。同時に、身近な地域の環境問題に目を向けてほしいという思いもあり、この岡山県を題材にして、環境問題を学ばせたいと考えた。

私はよく海や山に行くが、どちらにもごみがたくさん落ちている。それらを目にするたびに、産業廃棄物を含めて、私たちの日常生活から排出されたこれらのごみを何とかしなければと考えていた。そのような折、学生時代の友人から、あまり世間に認知されていない「海底ごみ」の存在を聞いた。それまでは海の底にごみがあることを私自身まったく知らなかった。そこで、この海底ごみは身近な環境問題について学ぶのによいテーマだと考えた。

もともと瀬戸内海の海底ごみはまったく管理されていなかった。漁師の方が魚をとるときに網に魚よりもごみの方が多くかかってしまうので、そのごみを自主的に持ち帰るといった運動をされていた。そのことを知り、中高生にも回収作業の現場を実際に見て、感じてもらおうと思い、平成20年から地歴部での海底ごみの回収と分別の活動を始めた。

活動を始めるにあたって、私自身がまず海底ご

み問題について知らなかったため、勉強することから始めた。勉強すればするほど、これはぜひとも生徒にも伝えなければいけないと実感し、その思いで今も活動している。

回収活動

私の知り合いの漁師の方にご協力いただき、漁船の底引き網で海底ごみを回収している。その漁船に生徒たちも乗り込み、回収・分別活動を行う。底引き網を入れ、20～30分漁船を動かして海底を引っ張る。海底ごみは面で拾う必要があるため、エリアを決めて漁船を旋廻してもらっている。

漁船を動かして網を引き上げる作業と、あがってきたごみを分別する作業を繰り返して3時間ほど行う。網をあげると、ごみとともに魚やヒトデなど海の生き物もあがってくる。生徒たちは漁船の上で生き物とごみを分別し、そこからさらにごみを細かく分別する。生き物は海にかえすか、漁師さんが持ち帰られる。私たちが利用させてもらっている漁港には、全国では珍しい海底ごみ専用のごみステーションがある。行政が処分の費用を出しており、海の漁業環境を守っている。分別したごみはそのごみステーションに出すか、啓発活動として展示するために学校に持ち帰っている。

海底ごみの現状

瀬戸内海には1万3000tものごみが眠っているといわれている。瀬戸内海は内海で海流が弱いので、ほとんどごみが動かない。回収されるごみは、ビニールやプラスチックなどほとんどが不燃物で、なかには産業廃棄物などの重いごみもあり、これらはおそらく海上で捨てられたものであろう。

海底ごみの比率としては7割が川から流れてくるといわれている。生活域から出されたごみそのまま川を通じて海に流れ出し、劣化して沈んでいくのだ。軽いごみのほとんどは川から流れ出たもので、浮いている発泡スチロールでも沈み、細かく小さくなっていく。小さくなったものは網を抜けてしまうため、残念ながら拾うことができない。大きくて重いごみは網が破れてしまうので、途中で引き上げるのをやめざるを得ない。悔しい



海底ごみについて街の人々に啓発活動を行う部員たち

が、そのような小さいごみと大きくて重いごみは海底に眠ったままである。ごみと生き物は半々か、ごみの方が多いときもある。引きあげたごみの多くはプラスチックやビニールなので個数は多いが、軽い。冬は漁師さんがとる魚の種類の関係で、網に爪がつけられる。重いごみは泥の下に埋まっておき、爪でひっかきながらあげることで、冬の方が回収するごみの量が多い。エンジンや電気製品など、本当にこのようなものが沈んでいるのかと思うようなものもあがってくる。冬場には5～10kg回収したこともある。そのようなごみが回収されずに海底に沈んだままになっているのは大きな問題である。堆積したごみが生物のゆりかごである海底のふたとなり、生育環境が破壊されてしまうからである。

活動の課題と目標

上記のような回収活動と同時に、啓発教材「海ごみかるた」の制作・配布（希望者には配布しています）と、これらを用いた地域での啓発活動にも取り組んでいる。生徒や私自身も海底ごみの存在を知らなかったように、世間でも多くの方が海底ごみ問題をご存知なのではないだろうか。学んだことを自分たちでとどめておくだけではなく、多くの方に知ってもらおうという活動は、回収活動と同じく、生徒たちのよい勉強になっていると考える。

また、一番の課題は生徒のモチベーションを維持することだ。夏は暑く、冬は非常に寒い。厳しい回収環境のなか、美しい瀬戸内海を取り戻すために生徒が取り組んでいる活動が地域に貢献しているという使命感をもたせることが大切である。

今後の活動と目標

海底ごみ問題は、まだまだ世間には認知されて



地歴部顧問・井上貴司先生（後列左端）と部員のみなさん

いない。そこで、環境問題の解決に向けて、私としてはまず「知ってもらおう」ことが一番大切ではないかと思う。地歴部の活動も、まず海底ごみについて知らないところから始まり、これではいけないという思いで行動してきた。一般の方にも、自分たちの生活から出たごみが、最終的には海底ごみになっているという事実を知っていただきたい。そのために、回収活動と啓発活動は今後もずっと同時進行で行っていきたいと考えている。ゼロになるまで、といったら話が大きいですが、「海底ごみゼロ大作戦」と名づけている。回収活動だけでも、海底ごみの量は減るが、ごみそのものの発生を防ぐことはできない。逆に、知ってもらおう啓発活動ばかりしても、ごみはたまったままで、海の環境が悪化するばかりだ。回収活動と啓発活動、この両方でごみの堆積量と発生量を減らしていけば、海底ごみはゼロになるのではないだろうか。海底ごみ問題を解決したい、この思いを大きな柱として今後も活動していきたい。

中学生のみなさんへ

環境問題というのは、社会に出てからは学ぶ機会が少ない。関心はあっても、個人や地域単位ではなかなか行動に移せていないのではないだろうか。そのスタートが、これから社会に出る中学生であってほしいと願っている。そのために、もう少し自然に目を向けてほしい。限りある自然のなかで私たちは生かされている。社会に出たときに、少しでも環境を意識した活動、ちょっとした心がけや思いやりをもつことが大きな力になるのではないだろうか。小さなことでも1億3000万人集まれば、本当に大きな力になる。そのことをエネルギーのある中学生には意識してもらいたい。